教家本月清集における朱墨点について

片　山　　享

1.　教家本諸本の朱墨点について

教家本月清集には定家本月清集にみられない朱墨点ならびに勝負付が記されている。この朱墨点は教家本諸本奥書に，

　　此合点者前大僧正釈阿入道両人之点也。不可有他見欤。

　　権大納言藤原御判

と教家の識語のあるもので，教家本の最も大きな特色をなすものである。すなわち，定家本が，良経の手許にとどめおいた草稿本であるのに対し，教家本は良経が俊成・慈円に合点を乞うた整理本で，[1] その時期は教家本成立の下限である元久元年11月11日以降，俊成の加点については，俊成は同年11月25日発病，重態となり，同30日に薨じているので，加点は24日以前となる。[2] 慈円の加点の時期は不明であるが，俊成加点の蓋然性のある時日が短いことから，俊成加点以前とは考えにくく，俊成加点の後間もなくとみてよいであろう。ところで朱点が俊成，墨点が慈円の合点であることは，日大図書館本（旧大島本・伝常縁筆・室町期写）奥書に，

　　墨点百五十一首 此内左右十三首 前大僧正慈鎮

　　朱点三百六十三首 此内左右六首 釈阿入道

とあり，東大研究室本（江戸最初期写）および刈谷図書館村上忠順書入本

1.　拙稿「秋篠月清集考」（甲南女子大学紀要第6号）「高陽院初度御会のこと」（甲南国文第19号）参照。

2.　「秋篠月清集の成立年代」（国語と国文学，昭15.2）

（板本）に

　　或本云，墨則吉水僧正慈鎮和尚，朱則五条三品入道釈阿之点也。

とあり，このことはそれぞれの合点歌の傾向を見ても首肯できるところで，われわれは教家本月清集朱墨点によって晩年の俊成（91才）および慈円（50才）の良経歌に対する評価を知り得るという興味ある意義を朱墨点にもつわけである。

ところで朱墨点は教家本諸本間にかなり異同があり，前記日大図書館本の朱墨点数註記もにわかに信じがたい面をもっている。朱墨点をもつ月清集諸本は現在瞩目するところ，次の13本である。

1.	日大図書館本（伝常縁筆）	室町写	一帖
2.	架蔵本（明応二年奥書本）		二冊
3.	書陵部桂宮本（智仁親王筆）		二冊
4.	神宮文庫（六家集本）	江戸初写	二冊
5.	島原・松平文庫	江戸期写	二冊
6.	蓬左文庫本	江戸初写	二冊
7.	太山寺本	室町後期写	二冊
8.	書陵部御所本（六家集十七冊の内）	江戸期写	一冊
9.	刈谷図書館村上忠順書入本（六家集板本）		二冊
10.	東大研究室本（下のみの零本）	江戸初写	一冊
11.	書陵部東山文庫旧蔵本	室町期写	一冊
12.	天理図書館本（六家集本）	江戸初写	一冊
13.	京大図書館本（六家集本）	江戸初写	一冊

このうち10以下は所謂定家本との校合本であって系統をやや異にするが，これら諸本の系統の大体をみるために各本の奥書を検討すると，

1.　日大図書館本

A(a)　本云 承久三年十一月廿六日書写了。

　　此合点者前大僧正釈阿入道両人之点也。不可有他見歟。

　　権大納言藤原 御判

(b) 春　部　勝七首　負一首　持四首
夏　部　勝八首　負一首　持四首
秋　部　勝廿首　負九首　持七首
冬　部　勝十首　負八首　持八首
恋　部　勝十六首　負五首　持四首
雑　部　勝十四首　負二首　持五首
旅　部　勝十首　負五首　持二首
神祇部　勝一首　負一首　持六首

已上

勝九十三首　負三十二首　持四十五首

B　安貞二年十一月廿日以宮内卿家隆卿 自筆本書写早。合点之長短取寸法合移早。

C　以件本重書写之

文永五年十二月十八日

一校了

D(a)　応永十六年臘下一日以冷泉中納言為尹卿本書写早。

隠士得清

(b)　墨点百五十一首　此内左右十三首 前大僧正慈鎮

朱点三百六十三首　此内左右六首 釈阿入道

E　本云 応永廿七年臘月朔日

年少之筆跡雖有其釈，為餞別之献之所也。

千松末葉一花余芳

正　徹 判

2.　架　蔵　本

この本には上冊奥の百首歌勝負数注記の後に他本にない「応永十六年臘月十四日以冷泉中納言為尹卿本書写了」の奥書がある。下冊奥にA(a)(b)・B・C・D(a)あり。ただしA(a)に「本云」なく「前之大僧正」とあり，また「不可有他見」とあって「欤」はない。A(b)については日大本では雑部・旅部の

順であるが，これは　　旅部　勝十四首　負二首　持五首
　　雑部　勝 十 首　負五首　持二首

となっている。これは実際の部立および勝負付からみて架蔵本の方が正しく，日大図書館本の誤りである。Bについては「家隆任了」の「任了」なく，Cの末の「一校了」なし。D(a)については「隠士得清」を欠き，D(b)Eなく，かわりに，

文安三年八月十二日書写之。

秋篠末葉判
一条殿御息三宝院新門主
教賢僧正御房事也。

とあり，次に「住吉社参篭之時法楽百首詠歌」を載せ，末に

明応二年七月廿二日写之。

とある。すなわち，日大図書館本が冷泉為尹本を書写した隠士得清を経て正徹に伝わった本の転写本であるのに対し，これは隠士得清本を醍醐寺三宝院門跡教賢僧正が筆写した本の転写本である。

3.　書陵部桂宮本

A(a)(b)BCD(a)あり。A(b)の旅部・雑部の順は架蔵本に同じ。Bも「任了」なし。ただしCには「一校了」とある。D(a)の次に

文安三季八月十二日書写了。

秋篠末葉御判

とあり，次に

いゑの風ふかぬもうれし中々に
　　さらはこと葉のはなやのこると

の歌一首があり，次に

申出普門院殿教御自筆書写了。於正本者至極欤，可秘之。点長短取寸付之。

康正二季二月十五日

次に

此集以右之奥書之本令写之并加一校者也。

幽斎叟玄旨判

一校了

とある。すなわち架蔵本と同系統本で，さらに普門院・細川藤孝を経た転写本である。普門院については松田武夫氏が嘗て九条満教の子九条政忠を当てていられ[3]，それでよいと思われるが，「教」と注記があるのがあたらなく，なお後考に俟ちたい。この本は下巻末尾に他本にない

前大僧正慈鎮天台座主に成て勧学講といふことをこしておこなひ侍けるをきゝてつかはしける

続後 みかくなる玉の光のかひあらは君かみ山の道はくもらし

の一首を続後撰集によって記している。

4.　神宮文庫本

桂宮本の写しで，奥書同じ。

5.　島原・松平文庫本

桂宮本系統で奥書同じ。ただしA(a)の「本云」なし。内題および本文は定家本によって校合を加えた跡がある。

6.　蓬左文庫本

A(a)(b)Bあり。ただしCA(b)の勝負数のうち雑部を欠く。旅部の勝負数は架蔵本に同じ。次に本文に脱落した「春のはしめに」の四首を書き，次に

此月清集 上下 二冊一覧之処，雖不古物殊勝也。仍加奥書返遣之畢。

安永五年三月十一日

太宰権帥藤 花押

とある。太宰権帥は正二位藤原公麗で明和3年太宰権帥となり，安永5年8月19日に辞任している。朱墨点は上冊のみに付す。

7.　太山寺本

この本は集組織が他本と異なり，上冊に部類歌を収め，下冊に百首歌五十首歌を収める。ためにA(a)が二分され，上冊奥に架蔵本と同じA(b)の勝負数

3.　「秋篠月清集成立年代攷」(国語と国文学　昭10.12)

を記し，神祇部と勝負合計数記との間に「権大納言藤原 御判」と記し，次に

奉寄進大山寺御本尊

為明石四郎左衛門尉妻女善室昌慶禅定尼

天文第八丁亥十一月二日命日　　即身成仏
施主長行 花押

と寄進書が別筆で記されている。下冊は他本の上奥にある百首歌の勝負数を記した後，

本云

承久三年十一月廿六日書写畢。此合点者座僧正釈阿入道両人之点也。不可有他見欤。

と記し，次に「又云」としてB，次に「又云」としてD(a)がくる。ただし「隠士得清」を欠く。次に

右一本者写本依有不審，重而借他本，令校合加朱墨両点，添勝負二字，写奥書等者也。然者尤可為証本者欤。

とあって次に上冊と同じ寄進書が記されている。これによると，太山寺本が書写した本は朱墨点・勝負付を欠いた本で，奥書もなかったものであり，本文からみて定家本の混入した本文であったと思われる。朱墨点は下冊のみについている。

8.　書陵部御所本

奥書はA(a)のみ。ただし上末の百首歌の勝負数注記は記している。朱墨点は墨点のみを記す。

9.　刈谷図書館・村上忠順書入本

添紙一枚に

右以朱書入分，以榎本氏写本校考者也。此以下奥書在古本。

とあって次にA(a)があり，次に

或本云

墨則吉水僧正慈鎮和尚之点，朱則五条三品入道釈阿之点也。

次いでBCD(a)があり，次に

文明六年十月十八日終書写之功了。件之本不審多之。只信本而已。

承久三年十一月廿六日書写之――。

秋篠之姓月清之名，除書之中有此姓名，吟草之端仮為題目，以花月百首置巻頭，分上下二帖為全部。墨則吉水僧正慈鎮和尚之点，朱則五条三品入道釈阿之点也。不他見欤。

権大納言藤原 御判

第十三世末葉・陶化隠士書判有

此一行霊元天皇宸筆

以九条家本 稙通公筆 写之遂一校了

嘉永四年辛亥六月四日，以伴資芳書入本書写一校終。

村上承卿忠順

やや錯雑した奥書であるが，九条家本の写で伴資芳の書入のある榎本本によって板本と校合し，朱墨点・勝負付を施しているのである。

以上朱墨点をもつ教家本系統諸本の奥書の状況であるが，これによってみると蓬左文庫本・太山寺本・書陵部御所本を除き，いずれもＡＢＣＤ(a)の奥書を有する。つまり冷泉為尹本を書写した隠士得清本からの転写本の伝本であり，従って現存教家本諸本の大体は得清本以後の書写の異同であるといってさしつかえない。教家本系としては上記諸本の外に朱墨点を記さぬ河野記念館本（室町期写）二帖がある。これは奥書にＡ(a)があり，次に百首歌五十首歌の勝負数注記が入り，次にＡ(b)ＢＣがあり，次いで

本云

右此本者冷泉黄門之御本也。卒尓申出之令書写并校合早。尤可為証本哉。

応永十七年六月十四日

散位範政

重和歌所本申出之令校合了。尤可得証本哉

応永十七年霜月十八日

民部大輔

とあって，これは今川範政が冷泉黄門すなわち冷泉為尹（為尹は応永９年３月28日権中納言となり，応永22年３月28月に権大納言になる。）の本を写さし

め，和歌所本と校合させた本の転写本で，他の教家本諸本と異なり，得清を経ないで為尹本から直接書写している点貴重である。ただし朱墨点なく勝負付のみを書く。

校合本について以下簡単に記すと，

10.　東大研究室本

外題には「式部史生秋篠月清集上下」とあるが，内容は下冊部類歌のみの零本である。奥書に

定家卿正筆本ノ奥書也。
校本奥書也。

是御平生之時所被注置之本也。夢後書留之。粗一見了。御本忿返上之間，不見中書之草字，誤無極不暗(ママ)覚事不能直付。

安貞二年五月二日

とあって，次にA(a)(b)があり，次に

御本ノ

右上下二冊以定家卿之書写本僧宗泜取持之，令校合了，年来不審之処々難決之処，忽処(ママ)証本喜懐也。

于時文明第九暦㷀賓上澣記之

或本云　墨則吉水僧正慈鎮和尚之点，
朱則五条三品入道釈阿之点也。

とある。教家本系の本文を定家本によって校合したものである。

11.　書陵部東山文庫旧蔵本

東大研究室本より書写は古い室町期写本であるが，東大研究室本系統の本で校合に取捨を加え，校本化を目指している。奥書はない。六家集板本はこの系統本である。

12.　天理図書館本

集組織が他本と異なり，部類部の上（四季部）が最初にあり，次に百首愚草（百首歌五十首歌）があり，次に部類部の下（祝部より釈教部に至る）が来る。奥書に「本云」として定家本奥書を書き，次に教家本奥書A(a)を記す。朱墨点は他本に比して少い。

13.　京大図書館本

天理図書館本と同系統本である。天理図書館本に比して本文に欠歌があり，朱墨点もやや少い。

以上必要な範囲で朱墨点を有する月清集諸本の奥書を中心にその系統を述べてきたが，次に各本の朱墨点の状況を掲げると次表のごとくである。ただし東大研究室本は零本であるからこれを除外した。同本は朱墨点に関しては書陵部東山文庫旧蔵本と異同はない。（本文奥の第１表参照）

この表にみられるように，朱墨点は諸本間にかなりの異同がある。ここで最も重要なのは日大図書館本と秋篠末葉すなわち教賢僧正本系の架蔵本・桂宮本・神宮文庫本・松平文庫本との異同である。まず秋篠末葉本系四本の相互の誤写・脱落を指摘し，それを整理することによって秋篠末葉本の朱墨点を想定し，他本との比較を進めることにする。（以下番号は第一表の歌番号を示し，各本は最初の文字，例えば桂宮本―桂で表示する。）

(1)　誤写とみられるもの

桂宮本と神宮文庫本および松平文庫本との間には同系統本としての書承関係があり，桂宮本の誤記・脱落は１・２例を除き，殆どそのまま伝えられている。従って例えば77「ひとりぬる」の神宮文庫本の朱点は初句のよく似た82「ひとりねの」の朱点の誤記であり，105「もしほやく」の同本朱点は隣接歌104「みよし野の」の朱点の誤記と考えられる。また架蔵本では朱墨の間に誤記があり，例えば18「けふこすは」では朱点二本を書き入れているが，これは朱墨点の誤記と思われる。誤記認定の結果を示すと次のようになる。

18架(朱二重点)→朱墨・77神→82（注に「此点ナシ」）・88(架)→92・105神→104・335松(朱墨)→336・345架(朱)→墨・388松(朱・墨左右点)→387・581架(墨)→朱・591松(朱墨)→除去・610架(朱)→墨・647架(朱)→墨・654神(墨)→652(朱)(注に「此テンナシ」)・717架(朱)→墨・883松(墨)→除去・1003神→除去・1018松(墨)→除去（後鳥羽院御製）・1144架(墨)→朱・1281松(朱墨)→1282・1291桂・神・松(朱墨)→1290・1362松→1363・1468架(墨)→朱・1470神→除去・1563架・桂・松(慈円の歌)→1564

上記に多少の説明を加えると，

1290　旅泊千鳥

をのれたにこととひこなんさよ千鳥すまのうきねにやとり(物や思ふとイ)佗ぬる

1291　羇中晩嵐

嵐ふき露のかこともかすそひては山のおくにやとり佗ぬる

前者は日大本・架蔵本・東山文庫旧蔵本に朱墨点，御所本に墨点がついており，後者は桂宮本・神宮本・松平本に朱墨点がついている。ちなみに1290の第5句は「やとりわひぬる」(架・桂・神・御)「やとり(物や思ふとイ)かね佗」(東)「宿り(物や思ふとイ)佗ぬる」(松) 定家本「ものやおもふと」とあり，また1291の第4句「は山のおくに」(架・桂・神・御)，「おく(すそイ)に」(東・松)，定家本「すそに」でいずれも教家本のあやまりである。これは両歌とも正治二年冬左大臣家冬十首歌合の歌であるが，前歌の方が旅泊の心細さが微細に表現されて抒情性に優れている。勝負付は日・東・刈・太に持とあり，（ただし御は勝）玉葉集に入れられ，1291は諸本負となっている。桂宮本の誤写とすべきである。1563「山さとに」は架・桂・松に朱点がついているが慈円の歌である。神はそれに気づいてか朱点をつけていない。これは次の1564の日・刈・東の朱点が正しく，秋篠末葉本の誤りとすべきである。

上記の外，架蔵本422・739・1130には朱点とともに墨点が付けられている。これは教家本諸本のうち他本にみられず，墨点が付けられていたか，誤記かにわかに決定しがたい。また，桂宮本1000に朱点が付けられており，これも他本になく，歌の内容からみても朱点の存在を決定しがたい。この四首の合点はしばらく存疑として扱いたい。

(2)　脱落とみられるもの

25(架)・43(桂・神・松)50墨(松)・54墨(松)・82(架)・219(神・松)・228(桂・神・松)・240(神)・244墨(桂・神・松)・298(桂・神・松)・324朱墨(架)・333朱墨(架)・344(桂・神・松)・346(桂・神・松)・347(桂・神・松)・352(桂・神・松)・398墨(架)・508(桂・神・松)・509(桂・神・松)・526(神)・532(神)・536(架)・544(神)墨(桂・神・松)・546墨(桂・神・

松)・555墨(神)・566墨(桂・神・松)・583(架)・599(架)・636(松)・647墨(桂・神・松)・655墨(架)・662(神)・714墨(松)・717墨(松)・720(神)・762墨(神)・801墨(架)・808墨(桂・神・松)・820墨(神)・826(神)・836墨(桂・神・松)・845(桂・神・松)・889墨(桂・松)・908(神)・909(神)・917墨(架)・918墨(桂・神・松)・920(神)・955(桂)・959墨(架)・985(桂・神・松)・1130朱左右点(神・松)・1161(架)・1180(架)・1325(架)・1340朱墨(桂・神・松)・1448(桂・神・松)・1453朱墨(架・松)・1510(架)・1511(架)・1521(架)・1540(松)・1548墨(架)・1549墨(架)・1564(神)

上記の外，架蔵本は朱墨左右点の左合点はすべて付けていないので，朱左合点をもつ926・977・1130・1408・1488・1595および墨左合点をもつ298・315・356・378・387・403・720・752・926・964・1408・1488・1595は脱落ということになる。

以上秋篠末葉本系四本の朱墨点の異同を整理することによって秋篠末葉本の朱墨点の所在を想定し得るのであるが，これを日大図書館本朱墨点と比較すると問題点は次のようになる。

(1) 秋篠末葉本系に朱墨点があって日大図書館本にない歌13首

256 すをこふる心よいかにつはくらめかへる野中の秋(定家本かせ)のゆふ暮（架・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

609 谷河のいはねかたしくあをやきのうちたれ髪をあらふ白なみ（架・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

610 花にゝぬ身のうき 雲のいかなれや 春をはよそにみよしのゝ山(墨)（架(朱)・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

612 山ふかみ花より花にうつりきて雲のあなたの雲を見る哉（架・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

616 心あてになかめし山のさくら花うつろふまゝにのこるしら雲（架・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

655 ひさかたの月をみや人たかためにこの世の秋(を一架・東　の一桂・神・松・定家本)の歟を契をきけむ(墨)（桂・神・松・刈・東・蓬・太）

660 あり明の月よりのち(定本に)の秋くれて山まに(まナシ—諸本定本)のこる(のこれる—諸本定本)松かせのこゑ（架・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

754 ことしみるわかもとゆひのはつ霜にみそちあまりの秋(そイ（諸本の）)のふけぬる(くれぬる桂,神,松)（桂・神・松・東・蓬・太(朱墨)）

917 たつねきてこゝには夏もあらし山こかくれてこそ(定本に)秋はありけれ(墨)（桂・神・松・東）

962 み山いてゝ花のかゝみとなる月はこのま分るやくもる成らん（架・桂・神・松・刈・東・蓬・太）

1102たかせ舟さほもとりあへすあくる夜にさきたつ月の跡のしら波（架・桂・神・松・東）

1103むら雨のあとこそみえね山のせみなけともいまたもみちせぬ比（架・桂・神・松・東）

1343なかめやるとを里をのはほのかにて霞にのこる松のかせかな(朱墨)（架・桂・神・松・東）

(2)　日大図書館本に朱墨点があり，秋篠末葉本系にない歌２首

353 谷ふかみはるかに人をきくの露ふれぬたもとになにしほるらん（日・刈・蓬・太）

981 やま人の衣なるらし白妙の月にさらせるぬのひきの滝（日）

(1)についてみると，西洞隠士百首の歌が多い。この百首は既に久保田淳氏が指摘されたごとく[4]建久７年11月25日政変以後，正治初年までの詠で良経篭居中の極めて述懐性の濃い百首である。610の歌はかかる我が身の沈湎を嘆いた歌であってこのような述懐歌を俊成がとるわけもなく，慈円がかつての一門の逆境時代を想起し加点を加えたものであると思われる。その点架蔵本の朱点は当然墨点のあやまりである。慈円はこの百首歌から

647 秋かせのむらさきくたく草むらにときうしなへる袖そつゆけき(墨)（日・架(朱)・蓬）

をとっているのも同様の意識からで（この場合も架蔵本朱点は墨点のあやま

4.　「新儀非拠達磨歌の時代読考」（和歌文学研究第20号）

り）この歌が慈円によって加点されたであろうことは確かと思われる。1343は文治六年女御入内御屏風歌の一首であるが，後年の秀歌

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

の発想の原型が感じられ，幼くすなおな歌であるが，俊成・慈円が合点を加えた可能性がある。1103はやや疑点が残るが，伝本上秋篠末葉本には確かに朱点が施されていた筈であり，他歌はいずれも合点の蓋然性のある歌である。

(2)について353は合点歌として疑点はなく，秋篠末葉本の脱落とみてよい。981は平明な歌で果して俊成の合点歌としての可能性があるか否か，やや疑問を感じる歌である。もし俊成合点歌とすれば晩年の俊成の好尚を卜させるものがあるが，今は存疑として一応加点の扱いにしておきたい。

日大本・秋篠末葉系本以外の諸本について略記すると，誤記と思われるものに，

243蓬(朱墨)→244・297蓬(墨左右点)→298・385京→384・418蓬・太→419・545蓬(朱墨)→546・582太→583・744東(朱墨)→743・1009東(朱墨)→1010・1094東→1093・1111刈(朱墨)→1112・1178刈(朱墨)→1179

があり，また上記二系統以外にあらわれる朱墨点として

385京・422刈(墨・ただし架にあり)・445天(墨)・545太(朱墨)・638太(墨)・704太・719太(墨)・727刈・754太(墨)・780刈・太(朱墨左右点)御(墨左右点)・806天・京・816太・897太(墨)・987刈・太(朱墨)御(墨)・990太(墨)・995御(墨)・1003刈(ただし神にもあり)・1125東(墨)

等があるが，現在のところ朱墨点所在の根拠は稀薄である。例えば

780 いはさりきいまこんまての空の雲月日へたてゝものおもへとは

の歌は正治初度百首の歌で新古今集巻十四恋四の入集歌である。太山寺本・刈谷本に朱墨左右点・御所本に墨左右点が付されているが，あるいは後人が入集歌に気づいて朱墨左右点を付したとも考えられる。この歌が俊成6首慈円13首の左右点を入れる歌とは思えない。ただ良経の新古今入集歌79首中，朱ないし墨点をもたぬ歌はこの歌の外，新古今集巻八哀傷部に入集した

定家朝臣か母の中陰三月尽にあたれりけるにつかはしける

1574　春霞かすみし空のなこりさへけふをかきりのわかれ成けり

一首である。俊成の朱点がないのは歌の優劣とは関わりなく定家の母つまり自分の妻への哀悼歌であるからと思われる。とすれば780の歌は問題となるわけであるが，この歌は所謂新古今構想歌として待恋の女性の心理を極度に凝縮した表現によって表わそうとした歌で，この歌に合点を加えなかったところに俊成晩年の好尚をみるべきであろう。

以上の朱墨点の検討によって，日本図書館本奥書の朱墨点注記

墨点百五十一首 此内左右十三首 前大僧正慈鎮

朱点三百六十三首 此内左右六首 釈阿入道

の歌数は訂正されねばならぬ。この注記は誰によって記されたかというに，奥書の注記の位置からみて，為尹卿本を書写した隠士得清があげられるが，仮りに得清とした場合，同じ得清本を書写した秋篠末葉本に記されないのは不自然であり，しかもこの注記は日大本のみにみられるものである。とすれば，得清より後，正徹に至る間に朱墨点数が注記されたと考えるのが順当であろう。この段階で朱墨点はかなり正確に数えられ（日大本朱点実数365(内左右点6)，墨点実数151（内左右点13）で誤差は朱点2首にすぎない。第二表参照）注記されたと思われる。ところがこの段階で既に脱落した朱墨点があったわけで，多少の存疑はあるが，

朱点　375首（内左右点6首）

墨点　155首（内左右点13首）

ということになる。

2. 朱墨点の意義

元久元年11月といえば，これより3年前建仁元年11月に勅撰集撰進の院宣が下り，その後1年半許りを経て各撰者達は撰歌を奏覧し，この年7月より撰歌部類の始まった時期である。良経が月清集を編んだのはほぼこれと並行

した時期で内部徴象からみて元久元年8月15日 以後11月10日 以前で 思われる。恐らく良経は新古今集編纂に刺戟されておのが家集を編むことを思い立ったと考えてよいであろう。そして「三品禅門者 当世之貴老，我道之師匠也」(建久九年後京極殿御自歌合跋文)と終生師事した俊成に11月11日以降11月24日までの間に合点を乞うたわけであるが，一方俊成は前年11月23日和歌所で九十賀を賜り，歌壇の長老として静かに撰集の推移を見守っていた時期である。月清集合点はかかる俊成最晩年の良経歌に対する評価を示すものであり，当然ながらそこに俊成晩年の好尚を投影したものであった。俊成の朱点375首は月清集全歌数1573首に対して23.7%で慈円の墨点155首（約10%）に比して極めて高率である。もちろんそこに両者の立場の相違があり，俊成・良経の師弟関係は極めて濃厚であるとはいえ，俊成にとって主家九条家当主摂政としての良経に対する配慮もあったと思われる。これに対して慈円の合点は甥良経に対するものとしてより自由な立場にあったことはいうまでもない。両者の評価の傾向を概観するに都合のよい百首歌五十首歌の合点数でまとめてみると次のようになる。

（第三表）

	俊成点		慈丹点	
	合点数	比	合点数	比
花月百首	14	6	4	3
二夜百首	7	3	1	1
十題百首	19	7	7	6
歌合百首	33	14	27	24
治承題百首	24	10	8	7
南海漁父百首	26	10	10	9
西洞隠士百首	19	7	4	3
院初度百首	31	12	20	18
院第三度百首	39	16	18	16
老若歌合五十首	19	7	6	5
句題五十首	21	8	9	8
計	252	100	114	100

上記の表で慈円の六百番歌合歌に対する評価が異常に高いこと（左右点4首が歌合百首にあり，これを勘案すれば慈円の六百番歌合に対する評価は極めて高い。)を除けば両者の合点数比は極めてよく似ている。建久期の速吟の二夜百首は両者共に少く，沈淪期の特異な述懐的傾向をもつ西洞隠士百首はやや少く，慈円にその傾向が一層顕著にあらわれている。さらに老若歌合五十首および句題五十首の比を修正すれば，建久期と正治・建仁期との間に一線を劃することができる。つまり建久期から正治・建仁期への良経の作風の展開を両者共に評価しているわけである。

俊成の撰歌の傾向を具体的にみるために俊成の歌合判と合点との関係をみておきたい。花月百首は建久元年9月14日に披講されたが，その撰歌合が同22日に催され俊成が判じている。各十首を合わせたと思われる撰歌合そのものは散佚したが，俊成の撰歌合資料の草稿とみられる紙背文書が嘗て荻野三七彦氏によって紹介された。[5] それによると良経の歌は花12首，月18首がぬきだされているが，（草稿には合点や符号がつけられている。)合点と比べると花の合点歌，8首中6首が一致し，月歌では8首中3首が一致する。紙背文書の撰歌では花歌で

(8)　さらに又ふもとの浪もかをりけり花のかおろすしかの山風（歌頭に○印）

（本文および注記は紙背書による。ただし歌番号は古典文庫歌番号）

(31)　花さかりよしの丶みねやゆきのやまのりもとめしにみちはかはれと（歌頭に○印）

(48)　ちる花をなはしろ水にさそひきて山たのかはつこゑかほるなり（歌頭に□印）

などのような華やかな共感覚的表現をもつ新風歌に俊成は特に心をとめているようであるが，こういう歌は合点歌にはなく，逆に撰歌にとられなかった

9　秋は又しかのねつけしたかさこのおのへのほとにさくら一むら

13　たちよれはみはしの桜さかりなりいくよの春のみゆきなるらん

5.　「藤原俊成本春記並にその紙背文書の研究」（史学雑誌，昭14.2）「俊成本春記その後の発見」（歴史地理，昭15.1）

25　あはれなる花の木かけの旅ねかなみねのかすみのころもかさねて

41　雲とみしみ山の花はちりにけりよし野の滝のすゑの白なみ

43　山おろしの谷に桜をさそひきてなをいはたゝく雪のした水

のような優美な歌に合点をつけている。この傾向は月歌でさらに顕著である。

(教家本宿かる・定家本やとれる)

(55)　しかもわひむしもうらむるところとてつゆけきのへに月そやとれる（合点を付す）

(59)　雲きゆる千里のほかに空さえて月よりうつむ秋のしらゆき

(60)　きよみかたはるかにおきのそらはれてなみより月のさえのほるかな（合点を付す）

(64)　むしあけのせとのしほちのあけかたになみの月かけとほさかるなり（合点〇印を付す）

(93)　よこくものあらしにまよふ山のはにかけさたまらぬしのゝめの月（合点を付す）

のような歌はとられず，撰歌にとられないで合点を付けた歌では

76　おく山にうき世はなれてすむ人のこゝろしらるゝ夜半の月かな

82　ひとりねの夜さむになれる月みれはときしもあれや衣うつこゑ

92　うき世いとふ心のやみのしるへかなわか思ふかたにあり明の月

といったさながら千載歌風を思わせるような述懐的抒情性の強い歌なのである。もとより新古今新風を育成し，歌壇の指導者として新古今歌風形成期を歩みつづけてきたこの老巨匠が新古今歌風の特質を評価し，その審美眼をもっていたことは勿論であって，月清集俊成合点が千載集的美意識で貫かれたというのでは勿論ない。それは前述のごとく新古今集撰集途上において良経の新古今入集歌79首中77首に合点が加えられていることによっても明らかである。例えば，六百番歌合の

寄風恋　17番　左

(378)　いつも聞くものとや人の思ふらむ来ぬ夕暮の松風の声

について六百番歌合判詞では「来ぬ夕暮，何の来ぬとも聞えずや，秋風の声もこと新しくや。右の庭の松風よろしく聞ゆ。勝とすべし。」としてこの歌を

負にしている。新風の構想歌としての凝縮した新奇な表現に難をつけているわけであるが，5年後の後京極自歌合ではこの歌を評して「此つかひ又心の花にといひ，物とや人のなといへる心，をのをのえむにして勝負又難分。」（69番判詞）と述べて六百番歌合判での批難を撤回し，月清集においても合点を加えているのである。

建久九年後京極自歌合は良経がそれまでの自歌から二百首を選び百番に結番して俊成に判を乞うた，云わば良経による自歌の建久期の総決算ともいうべき自歌合で，当然ながらこの自歌合歌で合点歌となった歌が多く，200首中102首を数えるのであるが，この合点歌のうち12首が自歌合の負歌で，しかも対手の勝歌に合点が付けられていない歌がある。つまり建久9年時点での俊成の評価と元久元年での評価が逆になっているのである。一応検討の必要があると思われるので次にそれを掲げる。（自歌合は類従本によるが，不審のところもあるので神宮文庫本「百番歌合」で校異を示し，合点歌には歌頭に○をつけて示す。）

1　七番左（神・勝）　花の歌よみける中に

九重に花（神の）の盛になりぬれは雲そくもゐのしるしなりける

右　春の歌よみける中に

○久かたの雲井にみえし伊駒山春はかすみの麓なりけり

春は霞のふもとなるらん，面影ありておかしく（神おもしろく）侍れと，猶九重の雲のしるしはなへての山の桜およひかたくやと覚え侍れは又左勝へくや侍らむ。（神まさると申へくや侍らん）

2　十九番左（神・勝）　郭公

うちもねす待よ更行ほととぎす軒にかたふく月に鳴なり

右　同

○橘の花ちるさとの庭の面に（雨イ）山ほと（神・雨）ゝきすむかしをそとふ

花ちる里のほとゝきす，昔とふらん（神・心）哀あさからす侍り（神を）。左の軒にかたふく月に鳴らむ時鳥（神・ほと）猶（神・たくひ）かきりなくや侍らん。

3　卅番左　鶉

○独ふす芦の丸屋の下つゆに床をならへてうつらなくなり

右　同（神・勝）

秋ならはとはかりみまし我宿のまかきの野へは鶉ふすまて

左の歌，床をならへて鳴らん鶉まことに歌さまおかしく侍り（神・を）。右のうた

籬の野辺はうつらふすまてと侍は，すへてかくは人申かたく見え侍れは，

尚勝（神・まさると申へくや侍らん）と可申哉。

4　卅二番左（神・勝）　秋のうたよみける中に

閣き夜の窓うつ雨にをとろけは軒端のまつに秋風そふく

右　野分

○きのふまてよもきにとちし柴の戸も野分にはるゝ岡のへの里

左の秋のうた（神・雨の夜右の）雨に野分のあした，又ともにおかしくのみきこえ（神・身にしみ）侍れは分

かたく侍れと，猶軒端の松に秋風そ吹といへる（神・ナシ）末の句ことにまされると

可申哉。

5　卅四番左（神・勝）同（月の歌あまたよみける中に）

雲きゆる千里の外に空さむく（神）月よりうつむあきのしら雲（神・白雲・露イ）

右　秋田

○山遠き門田の末は霧はれてほなみにしつむ有明のつき

此番も山遠き門田の末はなといへるわたり（神・に）も心詞いみしくおかしくは侍

を，又月よりうつむと侍るすかた心，猶勝（神・まさると侍にや）へくやと見え侍る也。

6　四十番左　女御入内月次屏風（神ナシ）に相坂関の駒迎書たるところ

○あつまよりけふ相坂のせきこえ（山イ）（神）て都にいつる望月のこま

右（神・勝）同屏風に仙家に菊咲たる所

君か代に匂ふ山路のしらきくはいくたひ露のぬれてほすらむ

左の歌都に出ると侍末の句なといみしくおかし侍るを初の五文字や，

すこし（神・したゝかにや）慥にや聞ゆらんと覚え侍る（神・ナシ）を，右のうたいくたひ露のと侍る心限

なく，祝の（神・ナシ）心の上に艶にも聞え侍れは右可勝（神・右のまさるへきにや）や侍らむ。

7　四十一番左　月の歌よみける中に

○村雲のしくれてすくる梢より嵐にはるゝやまのはのつき

右（神・勝）秋のうた（神・ナシ）読ける中に

見る月の山（はイ）（神）よりやまにうつりきぬねぬ夜のはての暁のそら

左のあらし（神・歌）にはるゝ山の端の月，人もあくかるゝ様に覚え侍（神・ナシ）るを，又

右のねぬ夜のはての暁のそら，すかた心いかにかくのことく侍（神のみは）るにか（神・事にや），

右の歌猶むねにあまる心地し侍（神・り）る。

8　四十五番左　初冬の心を

○月やとす露のよすかにあきくれて憑めし庭はかれ野成けり

右（神・勝）　（神・枯野）

見し秋をなにゝ残さん草の原ひとつにかはる野辺のけしきに

露のよすかに秋くれてと侍るいみしくありかたく見え侍（神・ナシ）るを，何に残

さむ草のはらといへるはたはり（神・ことも蟹にきこゆ），殊に聞え侍る。心今少しは勝と申へく（神・心中には）（神・まさると可申に侍らん）

哉。

9　五十六番左同（冬朝）

○しもとゆふかつらき山のいかならむ都も雪はまなくときなし

右（神・勝）　歳暮歌よみける中に

雪つもる梢に雲はへたつれと花にちかつくみよし野の山

左しもとゆふかつらき山（神・ナシ），おかしく侍（神・のことに）るを花にちかつく三吉野の山，

猶ことに覚え侍る。

10　六十一番左（神・勝）　後朝恋

今はとて涙のうみに梶をたえおきそわつらふ今朝の舟人

右　寄雲恋（神・ナシ）

○暁の風にわかるゝ横雲を起行そてのたくひとそ見る

左の泪の海，かの狭衣と申物語なんとおもひ出られて殊に艶に覚え侍（神・ナシ）。

まさると申へきや（神・く）。

11　八十四番左同（旅のこゝろを）

○出しよりあれまくおもふ古郷にねやもる月を誰とみるらん

右同（神・勝）

忘れすは都の夢やをくるらん月は雲ゐをうつの山こえ（神・に）

月は雲井をなと侍るうつの山越，猶以心ほそくや侍らむ。

12　九十二番左（神・勝）月の歌あまたよみける中に

わか宿はをは捨山にすみかへて都のあとを月やもるらむ

右　古郷のこゝろを

○ふる里はあさちか末になりはてゝ月に残れる人のおもかけ

月にのこれる面影，まことに有かたく侍れと（神・も寔しのひかたく侍るを），左の都の跡（神・歌）を月やもるらんと侍るこゝろすみかへてとをかれて侍ること（神・なと）（神・ナシ），限りなく侍るにや。猶勝と申侍へきにや（神・哉）。

1の左歌「九重の」は前述の花月百首撰歌草稿・花12首中にも撰んだ歌で，こゝでも勝と判じてその理由として「猶九重の雲のしるしはなへての山の桜およびかたくやと覚え侍れは」と歌の優劣に関係のない判定理由を述べるのであるが，俊成にとってはやはり「雲そくもゐのしるしなりける」という下句の表現のおもしろさ新しさにあったと思われる。合点ではこの歌を捨て，右歌のなだらかな調べをもつ優美で歌柄の大きい歌をとるのである。

いったいこの自歌合判では表現の新奇さ，巧みさを高く評価している傾向がみられるのであって3において左の歌姿を賞美しながらも「まかきの野辺は鶉ふすまて」の新風表現の巧みさを「すへてかくは人申がたく見え侍」と賞し，4においても「軒端の松に秋風そ吹く」という表現，5の左歌の「月よりうつむあきのしら雲」という新奇な表現にささえられた歌姿を評価する。2・10の例もこれに準じてよいであろう。もとより歌姿を重視した俊成にあって，歌の姿を無視した評ではないが，しかし部分的な表現の新しさ，巧みさをかなり強くおし出しているのであって，こうした表現の新しさや巧みさは晩年の俊成にとってそれほど重視するにあたらなかった。むしろさらに歌全体の姿の調和と韻律をより重視するというところに合点歌の基準がおかれ，そこに負歌に合点歌が生じてきたのではなかったろうか。

このことは逆に自歌合判で部分的な欠陥を指摘することによって負歌とした歌に合点を付すという現象を生ぜしめた。6の場合がそれであるが，右歌の祝言の歌としての心深さにはやゝ主情的なところがみえ，左歌のがっしりとした歌柄の大きさには及ばない。判詞では左歌に対し，「都に出ると侍末

の句なといみしくおかしく侍るを初の五文字や，すこし慥にや聞ゆらんと覚え侍」というのであって，たしかに初句はこの歌にとってただ詞の強さがあり，やや平板な感じを与えるが，歌全体の姿としては長高い調べをもち，晩年の俊成はかかる長高い姿により強い共感をもったものと思われる。この傾向は9の左歌についてもいえるところである。

ところで7の場合はやや事情を異にする。俊成は右歌に対して「ねぬ夜のはての暁のそらすかた心いかにかくのことく侍るにか。右の歌猶むねにあまる心地し侍る。」と最大級の賛辞を呈しているが，「むねにあまる心地侍る」とはあまりに主情的な受けとめ方である。この歌は月清集秋部の「月くまなかりける夜なかめあかして」と詞書した六首中の一首で，この一連の月歌はいずれも憂愁に富んだ歌である。今他の三・四首をあげると

1206　袖のうへにやとかす露のたまらすはたゝ雲ゐなる秋の夜の月

1207　物思ふわれかはあやな秋の月たつねて袖の露にすむらん

1209　身やはうき空やはつらき秋の月いかになかめて袖ぬらすらん

1210　ことしとて秋やはかはる月かけにならはぬほとの心そひぬる

などの歌で，1206の歌は自歌合に入れられて，「是又両方共に心のふかさも姿のおかしさもおなしくはおほえ侍れ」と評されている歌である。これらの歌の詠歌年次は不明であるが，あるいは建久7年11月25日の政変以後篭居中の歌であったかもしれない。とすれば，俊成はその詠歌事情を知っていて良経の心情に温い同情をよせたことになるわけである。もっともこの自歌合には「ふかく身にしみて」(5・28番判詞)「共に露かゝる心地し」(8番判詞)「袖もしほる心地し」(25番) などように主情的受容傾向が顕著なのであって，俊成の自歌合に対する態度はとりわけ主情的・心情的批評態度をもっていたことが知られる。月清集合点においてはかゝる主情性や心情性からはぬけ出て秀歌撰としての立場を貫ぬいていると思われる。

そして12の歌において左歌の新奇な着想の歌を捨て余情の深い幻想的面影ある構想歌をとったのは新古今歌風への一段の理解の深化であったと思われる。もっとも8の右歌は六百番歌合・枯野十三番左歌で，右方が「草の原聞

きよからず」と難じたのに対して

左，何に残さん草の原といへる艶にこそ侍るめれ。右方人草の原難申之条，尤うたゝあるにや。紫式部歌よみの程よりも物書く筆は殊勝なり。その上花の宴の巻は殊に艶なるものなり。源氏見さる歌詠みは遺恨の事なり。……左歌よろし。勝とすべし。

という有名な判詞をもつ歌なのである。この歌は目もあやな秋草の景色から枯れ枯れとした冬枯れにかわってゆく冬野の叙景歌ともみられる歌であるが，「見し秋を何に残さん草の原」に俊成は鋭く源氏物語・花の宴の朧夜月夜の君の歌をめぐる艶な情調を感じとったのであって，こうした物語的情調への志向は例えば建仁二年九月十三夜水無瀬殿恋十五首歌合で院の御製

君ももしなかめやすらん旅衣朝たつ月をそらにまかへて

に対し「左の歌，朝立つ月を空にまかへてと侍る心すかた，源氏物語花のえんの歌なと思ひ出られて，いみしくえんにみえ侍り。」と評した判詞もあり，終生変らなかったと思われるのであるが，六百番で勝とし，自歌合において「何に残さむ草のはらといへるはたはり（神・ことも賢にきこゆ。），殊に聞え侍る。心今少しは勝と申（神・まさると可申に侍らん。）へく哉。」と評した歌を捨て，左の負歌をとったのは何故か，心はそれとしてこの歌のやや誇張された強い調べにあったと思われ，歌姿の調和した左歌を選んだと考えてよいのではなかろうか。この点建久期と建仁期とでは俊成自身の美意識にも微妙ながら変化が感じられる。それは歌姿の調和と調べのなだらかさとをより重視する方向である。良経歌に関していえば建仁期以後の俊成判の歌合―建仁元年3月29日新宮撰歌合・同4月30日鳥羽殿影供歌合・同8月3日和歌所歌合・同8月15夜撰歌合・建仁2年9月13夜水無瀬殿恋十五番歌合・同年頃千五百番歌合春巻三・四―には負歌の合点歌は殆どないのであって，[6] それは建仁期以後の俊成の変らざる歌評態度があったと考えられる。建仁期の俊成の歌評態度については良経のみならず，歌合判全体をとり

6. 相手歌が女房である場合を除き，水無瀬殿恋十五首歌合に2首の負歌がある。ただし，74番は俊成卿女の歌が秀歌であって「愚老が面目にも侍るへし」と断って勝としたものであるから，問題になるのは25番左の1首のみである。

上げて論証しなければならないが，後日を期したい。ともあれ，全歌数の凡そ4分の1弱にものぼる俊成の合点は抒情性の強い歌から物語的構想歌に至る極めて範囲の広いものであるが，極端な主情性と同時に極端な物語的世界への傾斜（例えば既述の新古今入集歌780をとらなかったのはこの点からと思われる。)を避け，歌姿の調和と韻律を重んずるところに統一的歌評基準を求め得るのではなかろうか。

それでは端的に良経歌に映じた俊成晩年の好尚はどうであったのか。俊成は月清集全歌の中で六首のみに左右点を付けている。加点は合点を付け，再度見てゆくとき両点を付すのが普通であり，この場合も例外ではなかったと思われるが，六首という少数から最もすぐれたと思われる歌に左右点を付したと考えてよかろう。次に俊成と慈円の左右合点歌をあげる。

俊成左右朱点歌

1　雲はみなはらひはてたる秋かせを松にのこして月をみるかな（926・老若歌合五十首・新古今秋上）

2　ゆくすゑは空もひとつのむさし野に草の原よりいつる月かけ（977・句題五十首・新古今秋上）

3　人すまぬ不破の関屋の板ひさしあれにしのちはたゝ秋の風（1130影供歌合・関路秋風・新古今雑中）

4　かすか山都のみなみしかそ思ふきたの藤なみ春にあへとは（1408家歌合に春祝・新古今賀）

5　わするなとちきりて出し面影はみゆらむものをふるさとの月（1488院影供当座に月前旅・新古今羇旅）

6　あまの戸をゝし明かたの雲まより神代の月の影そのこれる（1595院春日社歌合暁月・新古今雑上）

慈円左右墨点歌

1　おく山にひとりうき世はさとりにきつねなき色を風にまかせて（298十題百首・新古今釈教）

2　よし野山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風そふく（315歌合百首

・新古今・春上）

3　いく夜われなみにしほれて貴船河袖に玉ちるもの思ふらん（356歌合百首・新古今恋二）

4　いつもきく物とや人のおもふらんこぬゆふ暮の秋かせのこゑ（378歌合百首・新古今恋四）

5　おもひかねうちぬるひまもありなまし吹たにすさめ庭の松風（387歌合百首・新古今恋四）

6　みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり（403治承題百首・新古今春上）

7　明日よりはしかの花そのまれにたに誰かはとはむ春のふるさと（720院初度百首・新古今・春下）

8　きりきりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん（752院初度百首・新古今秋下）

9　雲はみなはらひはてたる秋かせを松にのこして月をみるかな（926老若歌合五十首・新古今秋上）

10　あふさかの関ふみならすかち人のわたれとぬれぬ花の白なみ（964・句題五十首）

11　かすか山都のみなみしかそ思ふきたの藤なみ春にあへとは（1408家歌合に春祝・新古今賀）

12　わする(れしイ)なとちきりて出し面影はみゆらむものをふるさとの月（1488院影供当座に月前旅・新古今羇旅）

13　あまの戸をゝし明かたの雲まより神代の月の影そのこれる（1595院春日社歌合暁月・新古今雑上）

両者を比較すると慈円の左右点が建久期から元久元年に至る（建久7首・正治2首，建仁3首，元久1首）良経の全歌歴から秀歌を撰び建久期の作品が過半数を占めているのに対し，俊成の左右点は一門の繁栄を祈った祝歌1首（建久5年詠）を除いてはすべて建仁以後（建仁4首・元久1首）のすなわち良経後期の秀歌に集中しているのであって，これは先にみた俊成合点歌

数の傾向と一致し，俊成が良経後期の作風に対して高い評価を与えていたことを明確にしてくれるのである。

1はすでに初期・文治6年女御入内御屏風の

ながめやるとを里をのはほのかにて霞にのこる松のかせかな

や建久元年花月百首の

たかさこのおのへの花に春くれてのこりし松のまかひ行かな

と詠んだ自然詠の展開線上に拓けた，澄みきった完成を示す歌境の歌であり，それは例えば「たかさこの」の歌について前掲自歌合十六番で

左，　残花

よしの山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風そふく

右（神・勝）　花の歌あまたよみける中に

高砂の尾上の花にはるくれて残りし松のまかひゆくかな

左の残る（神・ナシ）春，むなしき枝に（神・の）春風，心ほそくも侍るを，右の残し松のまかひ行らむ心，なを勝て覚え侍にや。

と評しているごとく，新古今秀歌の一となった左歌さえ，右の自然詠に対して負としているのであって，俊成が1「雲はみな」の歌を良経生涯の秀歌としたのは当然である。6は神韻縹渺とした歌柄の大きい歌であって後期良経の代表作たるに恥じない。5は構想歌的発想の歌であるが，作者の抒情に裏づけられた余情のある歌であって俊成の好尚に叶った歌と思われるが，同時に1・5・6の歌が当時において良経後期の代表作と認められていたことは慈円の左右点と一致することによっても明らかである。ところで2・3の歌はやや疑問がある。2の歌は建仁元年院句題五十首の野径月の歌題の歌で，旅のゆくえに広がる広漠たる武蔵野の草原にのぼりくる月影を点じ，寂しく心ぼそい境であるが，より強く絵画性を感じさせる歌であって，代表作とするにはやや磨きのたりなさを感じさせる歌である。「ひとつ」という表現は多様なものを集約して単一化する良経好みの表現で，習作期の和歌から撰ばれて千載集に入集した7首中2首にあらわれ，花月百首においても

65おもひやる心にかすむうみ山もひとつになせる月のかけ哉

80よもの海なみもひとつにすむ月の影かたぶかぬ君か御代かな

以下愛用した表現で集中14例を数える。

3は古来評価の分れる歌で，八代集抄では師説として「此只秋の風といふ詞古人称美し給へり。不破の関屋あれはてゝのちは只秋風はかりしてすむ人もなくとふ人もなく物さひしき気色詞の外に余情かきりなし。板ひさしあれてのゝちはなとの詞つかひまて凡俗をはなれは云々」と述べ，美濃の家つとは「此結句むかしよりめてあへる事なり。まことにめつらかなるいひさまにてめてたき方もあれとも，させる意もなきにいうならさる詞也。」と欠陥を指摘し，褒貶の分れるところである。尾張の家苞は「此御歌唐詩の七言の落句のしらべをおほしたるにてめつらかにいとめてたし。いうならさる詞とは句からの非尋常なるをいはるゝなれと其非尋常なるを見ても必すおもほす所ありてよませ給へるなる事はしからすや。」と弁護している。たしかに漢詩的句法を思わせる単純化があり，凡俗でない表現といってよいが，石田吉貞氏が「省略に過ぎて思わせぶりな磨きの足らぬ感じがないでもない。」（新古今集全註解）と評されるごとく完成された表現とはいいがたい面をもっており，良経の代表作とするにはやや疑問なしとしない。しかし，俊成がこの歌に左右点をつけたとするならば，（それは現存教家本を信ずるかぎり疑いのないことなのだが）俊成はこの歌の凡俗ならざる表現を称美しているわけである。そしてこの2・3の歌に共通するものを求めるならば，複雑多様なものの単純化・単一化であり，晩年の俊成の好尚は曲折微妙を尽した余情歌よりも単一表現化した余情歌を求めたのではなかったかと思うのである。

おわりに調査の便宜を与え下さった橋本不美男，有吉保氏ならびに閲覧に際してお世話頂いた書陵部はじめ各文庫・図書館・寺院の職員の方に御礼申し上げる。なお本稿は昭和48年1月20日和歌文学会月例会に口頭発表したものである。

第1表　月集清諸本朱墨点所在一覧

部	歌番号	初句	日本		大本		架蔵本		桂本		宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太寺本		山本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
花月百首	1	むかしたれ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	9	秋は又	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	13	たちよれは	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	18	けふこすは	○	○	◎		○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									架蔵本朱二重点
	25	あはれなる	○				○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	41	雲とみし	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	43	山おろしの	○		○												○				○		○										
	50	たかさこの	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	54	さらぬたに	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
	74	月たにも	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
	76	おく山に	○														○						○										
	77	ひとりめる											○																				神宮文庫本注「此朱ナシ」
	82	ひとりねの	○						○								○		○		○		○										
	88	うき世とは			○																												
	92	うき世いとふ	○						○		○				○		○		○		○		○										
	93	よこ雲の															○																
	96	むら雲の	○		○		○		○		○				○				○		○		○										
二夜百首	104	みよし野の	○		○		○								○		○		○		○		○										
	105	もしほやく									○																						
	115	わするなよ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	
	125	かけふかき	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	145	きのふけふ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	146	しかのうら	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	155	あかつきの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	156	みよし野の	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
十題百首	202	ひさかたの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	205	はるゝ夜の	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	210	春の花	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	214	おほる河	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○										
	217	あはれいかに	○		○		○		○		○				○		○		○		○		○										
	219	わけくらす	○		○		○								○		○		○		○		○										
	220	あしからの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								○	
	225	ふるさとは	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								○	
	228	わか宿は	○		○												○				○		○										

部	歌番号	初句	日本大本 朱	日本大本 墨	架蔵本 朱	架蔵本 墨	桂宮本 朱	桂宮本 墨	神宮本 朱	神宮本 墨	松平本 朱	松平本 墨	刈谷本 朱	刈谷本 墨	東山本 朱	東山本 墨	蓬左本 朱	蓬左本 墨	太山寺本 朱	太山寺本 墨	天理本 朱	天理本 墨	京大本 朱	京大本 墨	御所本 朱	御所本 墨	備考
十題百首	233	秋の夜に	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	239	谷河の	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	240	しけき野は	○		○		○				○		○		○		○		○								
	241	春はみな	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	242	むめかゝを																	○	○							
	243	行人の															○	○								○	
	244	ゆくすえに	○	○	○	○	○		○		○		○	○	○				○	○							
	247	かたをかの	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	256	すをふる			○		○		○		○		○		○		○		○								
	262	たくへくる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	◎						◎	
	286	みやゐせし	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○						○	
	297	はてもなく																◎									
	298	おく山に	○	◎	○	○		◎		◎		◎	○	◎		○			○	◎						◎	
歌合百首（六百番歌合）	302	そらはなを	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	306	みやこ人	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	309	おもかけに																	○	○							
	310	見ぬ世まて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								○	
	315	よし野山	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎						◎	
	320	うたゝねの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	321	かさねても	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	324	いり日さす	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	325	なくせみの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	328	はかなしや	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	329	ひとりふす	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	330	きのふまて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	332	ものおもはて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	333	山とをき	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
	335	こゝろには									○	○															
	336	うつの山	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○							
	337	はゝそ原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	340	たった姫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	341	ちりはてん	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	344	風さむみ	○		○								○				○		○								
	345	せり河の		○	○			○		○		○		○		○		○		○						○	
	346	雲ふかき	○	○	○	○		○		○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太寺山本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
歌合百首（六百番歌合）	347	し水もる	○	○	○	○		○		○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	352	もらすなよ	○	○	○	○		○		○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	353	谷ふかみ	○										○				○		○								
	356	いく夜われ	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○		○	◎	○	◎	○	◎	○	○				○	
	360	わすれしの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	
	370	見し人の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	
	375	まくらにも	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	378	いつもきく	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○		○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	○		◎	
	380	しのひかね	○		○												○		○		○	○	○				
	382	よさの海	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	384	ふるさとに	○		○		○		○		○				○		○		○		○						
	385	こひわたる																					○				
	387	おもひかね	○	◎	○	○	○	◎	○	◎			○		○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	○		◎	
	388	ときしもあれ									○	◎															
	391	ふえ竹の	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○						
	398	しほかせの	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
治承題百首	403	みよし野は	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎						◎	
	404	あさみとり	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	407	うくひすの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	415	花はみな	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	
	418	ほとゝきす															○		○								
	419	たちはなの	○		○		○		○		○				○						○		○				
	421	さみたれに	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	422	五月雨の	○		○	○	○		○		○		○	○	○		○		○		○		○				古典文庫「秋篠月清集」では朱点がおちている。
	423	さみたれに	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○		○				
	424	花にとひ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	425	五月雨の	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	426	秋かせに	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	428	きよ見かた	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	430	まきの戸の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	434	まのゝ浦の	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	445	しもとゆふ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○	○					
	449	いそのかみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
	456	しのふるに	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	457	人とはゝ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				

部	歌番号	初句	日本大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		逢左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
治承題百首	466	又もこん秋をイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○				○	
	475	秋かせにうつろひし	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	481	おりしより	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	484	あけかたの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	488	うつもれぬ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	489	うき世かな	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
南海漁父百首	503	からさきや	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	504	なにはつに	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	505	春の色は	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	506	はる風に	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	508	春はたゝ	○		○								○						○								
	509	いまはとて	○		○								○						○		○		○		○		
	526	袖にちる	○		○		○				○		○		○		○		○		○		○		○		
	527	くれかゝる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
	532	はるかなる	○		○		○				○		○		○		○		○								
	533	松にふく	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	536	すまの浦	○				○		○		○		○		○		○		○								
	541	月やとす	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	544	きえかへり	○	○	○	○	○				○		○	○	○		○	○	○	○							
	545	こよひたれ															○	○	○	○							
	546	まくらにも	○	○	○	○	○		○		○		○	○	○				○	○							
	555	たかためそ	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	
	566	もろともに	○	○	○	○	○		○		○		○		○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	568	いはかうへの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	569	またしらぬ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				
	580	をのれたに	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	581	つま木おる	○				○	○		○		○			○		○		○								
	582	しめてけり																	○								
	583	こゝろをそ	○				○		○		○		○		○		○										
	584	このさとは	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	587	あきらかに	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	591	おもひとけは									○	○															
	592	われなから	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
	593	人の世は	○		○		○		○		○		○		○												
	599	みなかみに	○				○		○		○		○		○		○		○								

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
西洞隠士百首	606	霜かれし	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	608	霞とも	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	609	谷河のの			○		○		○		○		○		○		○		○								
	610	花にゝぬ			○			○		○		○		○		○		○		○						○	
	612	山ふかみ			○		○		○		○		○		○												
	615	ことし又	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	616	心あてに			○		○		○		○		○		○		○		○								
	617	かり人の	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	618	ぬしもなき	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	636	ほかは夏	○		○		○		○						○		○		○								
	638	けふまては																		○							
	639	秋かせは	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	646	ひくらしの	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	647	秋かせの		○	○													○									
	652	さをしかの	○		○		○				○		○		○		○		○								
	654	きよみかた								○																	神宮文庫本，頭注に「此テンナシ」
	655	ひさかたの						○		○		○		○		○		○		○						○	
	660	あり明の			○		○		○		○		○		○		○		○								
	662	ふるさとの	○		○		○				○		○		○		○										
	665	神な月	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	674	山おろしの	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	687	はるかなる	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	692	うき世かな	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
院初度百首	704	かすか野の																	○								
	706	梅花	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	710	ときはなる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	714	かへる鴈	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	715	えたかはす	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	716	春の池の	○		○		○		○		○		○		○		○										
	717	やすらはて		○	○			○		○				○		○		○		○						○	
	719	はつせ山	○		○		○		○		○		○		○		○		○	○						○	
	720	明日よりは	○	◎	○	○	○	◎		○	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎						◎	
	727	郭公											○														
	728	いさり火の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	734	秋ちかき	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	

部	歌番号	初句	日本		大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太左本		山寺本		天理本		理京本		大京本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
院初度百首	738	おきの葉に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	739	みたれあしの	○		○	○	○						○		○		○		○		○												
	740	をしなへて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	743	とこ世いてし	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○										○	
	744	秋の田の															○	○															
	748	からさきや	○		○										○																		
	749	月見はと	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	751	ぬしやたれ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○			○					
	752	きりきりす	○	◎	○		○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○				○	
	753	たつた川	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○			○					
	754	ことしみる					○		○		○						○		○		○	○										○	
	755	わするなよ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○			○					
	756	あけかたの	○		○		○						○		○		○		○		○				○							○	
	759	むらしくれ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○					
	760	さゝのはゝ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○					
	762	よし野川	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○					
	764	かたしきの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○					
	771	恋をのみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○						○	
	774	かちをたえ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○						○	
	780	いはさりき													◎	◎					◎	◎										◎	
	783	雲はねや	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○						○	
	789	雲かゝる	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○								
	790	わすれしの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○						○	
	800	しき嶋や	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○						○	
院第三度百首（千五百番歌合）	801	をしなへて	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	
	805	うくひすの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○		○						
	806	つまこふる																							○		○						
	808	わたのはら	○	○	○	○	○		○		○		○		○	○	○		○		○				○	○	○	○				○	
	811	山桜	○		○		○		○		○		○				○		○		○				○								
	812	たれをけふ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○								
	813	春風は	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○								
	815	さくら花	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○			○					
	816	明はては																			○												
	818	はっせ山	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○				○			○					
	820	てにむすふ	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○				○	○	○	○										○	

部	歌番号	初句	日本		大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太寺本	山本	天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
院第三度百首（千五百番歌合）	822	うくひすの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	823	あり明の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	826	とふ鳥の	○		○		○						○		○		○		○		○		○		○				
	827	かさゝきの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	831	山姫の	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	832	松かせの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	836	ふか草の	○	○	○	○	○		○		○				○	○	○		○		○	○	○	○	○	○		○	
	837	おほかたの	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	838	しら露も	○		○		○		○		○		○		○		○		○				○		○				
	842	とこよにて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	845	秋なれは	○		○										○				○										
	847	かち人の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	851	あきはなを	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	854	こけのうへに	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	863	朝日さす	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	864	みむろ山	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	871	ぬれてほす	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	876	しらせはや	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	880	よそなから	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							
	883	ゆきかよふ	○		○		○		○		○	○	○		○		○		○		○								
	886	身にそへる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	887	めくりあはむ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	888	わか涙	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	889	われとこそ	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	890	なけかすよ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○		○			○	
	891	みな人の	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	893	ふねのうち	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	897	月日のみ	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○	○							
	898	をしかへし	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	
	899	うきしつみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	
老若歌合五十首	901	今朝よりは	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	904	かすみより	○		○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	908	いつまてか	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	909	風ふけは	○		○		○				○		○		○		○		○		○								
	914	五月山																			○								

部	歌番号	初句	日本大		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
老若歌合五十首	917	たつねきて	○		○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○								
	918	ほたるとふ	○	○	○	○	○		○		○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	920	とこなつの	○		○		○				○		○		○		○		○								
	921	秋をあきと	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	924	たか秋の	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	925	露のうへに	○		○		○		○		○				○		○		○								
	926	雲はみな	◎	◎	○	○	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	○	○	○		◎	
	928	月のこる	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	929	みわたせは	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	930	草も木も	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	931	秋かせに	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	932	ふしなれし	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	934	みなかみや	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	935	月そすむ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	936	まきの戸を											○						○								
	937	あつまちや											○						○								
	938	山人の											○						○								
	949	よゝをへて	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
句題五十首	951	春きても	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	952	花を見て	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	954	ほのほのと	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	955	たつねはや	○		○				○		○		○		○		○		○								
	958	のかれすむ	○		○		○		○		○				○		○		○								
	959	よし野山	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○							
	962	み山いてゝ			○		○		○		○		○		○		○		○								
	964	あふさかの	○	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎						◎	
	968	ふるさとの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	
	972	ふるさとの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○						○	
	977	ゆくすえは	◎	○	○	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○						○	
	981	やま人の	○																								
	983	その色と	○		○		○		○		○				○		○		○								
	985	たれとなく	○		○								○						○								
	987	わすれしな											○	○					○	○						○	
	990	秋はいま	○		○		○		○		○		○		○				○	○							
	993	わすられて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
句題五十首	994	やすらひに	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	995	たか秋の	○		○		○		○		○		○		○		○		○							○	
	996	ふかきえに	○		○		○		○		○		○		○		○		○								
	997	秋はてゝ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	999	恋わひて	○		○		○		○		○				○		○		○								
	1000	我恋は					○																				
春部	1001	よし野山	○		○		○		○		○		○		○												
	1002	としくれし	○		○		○		○		○		○		○												
	1003	うこきなき							○				○														
	1004	このころは	○		○		○		○		○		○		○												
	1005	千さとまて	○		○		○		○		○		○		○												
	1007	あふさかの	○		○		○		○		○		○		○												
	1008	春やとき																								○	
	1009	春風の													○	○											
	1010	あたら夜の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○													
	1012	けふも又	○		○		○		○		○		○														
	1018	けふたにも(御製)										○															
	1019	さそはれぬ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											○	
	1027	霜をきて	○		○		○	○	○		○		○		○												
	1028	ねぬる夜の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											○	
	1046	ふもとゆく	○		○		○		○		○		○														
	1050	みやまちや	○		○		○		○		○		○		○												
	1054	ふるすうつむ	○		○		○		○		○		○		○												
	1055	おとろかす	○		○		○		○		○		○		○												
夏部	1060	なかめつる	○		○		○		○		○		○		○												
	1063	さみたれを	○		○		○		○		○		○		○												
	1078	うちしめり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1079	五月雨に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1089	たつた河	○		○		○		○		○				○												
	1092	夕立の	○		○		○		○		○		○														
	1093	夏の夜を	○		○		○		○		○		○														
	1094	夏の夜は													○												
	1102	たかせ舟			○		○		○		○				○												
	1103	むら雨の			○		○		○		○				○												

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
秋部	1111	露のしたに											○	○													
	1112	色かはる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○										○	
	1114	ときしあれは	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1118	さとはあれて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1122	ふかゝらぬ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1123	秋の野の		○		○		○		○		○		○		○										○	
	1124	秋の雲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1125	これも又	○		○		○		○		○		○		○	○											
	1130	人すまぬ	◎		○	○	⊙		○		○		◎		◎												
	1140	きゝすてゝ	○		○		○		○		○		○		○												
	1144	やはた山	○			○	○		○		○		○		○												
	1145	をちこちの	○		○		○		○		○		○		○												
	1157	あし引の	○		○		○		○		○		○		○												
	1159	なにゆへと	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											○	
	1160	秋の色を	○		○		○		○		○		○		○												
	1161	秋といへは	○				○		○		○		○		○												
	1162	袖のうへは	○		○		○		○		○		○		○												
	1163	みすしらぬ	○		○		○		○		○		○		○												
	1169	みよし野を	○		○		○		○		○		○		○												
	1178	さまさまの											○	○													
	1179	風のをとは	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○										○	
	1180	見る夢は	○				○		○		○		○		○												
	1187	し水せく	○		○		○		○		○				○												
	1212	おもひいてゝ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○										○	
	1214	あわ雪を	○		○		○		○		○		○		○												
	1234	このしたに	○		○		○		○		○				○												
	1239	山さとは	○		○		○		○		○		○		○												
	1241	世のうきを	○		○		○		○		○				○												
	1267	まくすはら	○		○		○		○		○		○		○												
冬部	1269	木葉ちりて											○														架蔵本朱点をつけ消す符号あり
	1272	このはちりて	○		○		○		○		○		○		○												
	1275	さゆる夜に	○		○		○		○		○		○		○												
	1276	ゆく年を	○		○		○		○		○		○		○												
	1281	ゆきて見は									○	○															
	1282	ゆく人の	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○											

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
冬部	1290	をのれたに	○	○	○	○									○	○										○	
	1291	嵐ふき					○	○	○	○	○	○															
	1296	一とせを	○		○		○		○		○		○		○												
	1307	草枕	○		○		○		○		○		○		○												
	1314	よし野川	○		○		○		○		○		○		○												
	1325	雪おれの	○				○		○		○		○		○												
	1333	さひしさは	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1340	むら雲に	○	○	○	○								○	○	○											
祝部	1343	なかめやる			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											
	1359	ゆふされは	○		○		○				○		○		○												
	1362	雲はるゝ									○																
	1363	あつまより	○		○		○		○				○		○												
	1366	秋霧の	○		○		○		○		○		○		○												
	1373	けふくれぬ	○		○		○		○		○		○		○												
	1378	池水に	○		○		○		○		○		○		○												
	1379	春かすみ	○		○		○		○		○				○												
	1383	を山田に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1389	はつせめの	○		○		○		○		○		○		○												
	1401	をのつから	○		○		○		○		○		○		○												
	1408	かすか山	◎	◎	○	○	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	◎	◎	◎	◎										◎	
	1412	をしなへて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
恋部	1417	いそのかみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1440	草ふかき	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1443	もりあかす	○		○		○		○		○				○												
	1444	なにゆへと	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1446	山かつの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1448	まてとしも	○		○								○		○												
	1449	わか恋や	○		○		○		○		○		○		○												
	1450	うちわすれ	○		○		○		○		○		○		○												
	1451	はつせ川	○		○		○		○		○		○		○												
	1453	おき原や	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○										○	
	1456	わくらはに	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○												○	
	1460	なには人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1461	うつ蟬の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1463	まちわひぬ	○		○		○		○		○		○		○												

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
羇旅部	1468	つなてひく	○			○	○		○		○		○		○												
	1469	水あをき	○		○		○		○		○		○		○												
	1470	しけりあふ							○																		
	1471	明かたや	○		○		○		○		○		○		○												
	1472	ともなくて	○		○		○		○		○				○												
	1480	むかしきく	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1481	あふさかの	○		○		○		○		○		○														
	1483	わするなよ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1484	ゆく船の	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1485	松嶋や	○		○		○		○		○		○		○												
	1486	はし姫の	○		○		○		○		○				○												
	1487	ふるさとを	○		○		○		○		○		○		○												
	1488	わするなと	◎	◎	○	○	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	◎	◎	◎	◎										◎	
	1489	みやこ人	○		○		○		○				○		○												
雑部	1510	山かけや	○				○		○		○		○		○												
	1511	やま里に	○				○		○		○		○		○												
	1512	月みんと	○		○		○		○		○				○												
	1517	ふもとまて	○		○		○		○		○		○		○												
	1520	滝のをと	○		○		○		○		○				○												
	1521	ひとりこそ	○				○		○		○		○		○												
	1523	をはり思ふ	○		○		○		○		○		○		○												
	1527	まことにも	○		○		○		○		○		○														
	1528	世のうきは	○		○		○		○		○		○		○												
	1537	きみをとふ	○		○		○		○		○		○		○												
	1540	よの中を	○		○		○		○				○		○												
	1544	まつたてる	○		○		○		○		○		○		○												
	1547	わすれなん	○		○		○		○		○		○														
	1548	ゆめにたに	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○										○	
	1549	あまの川	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○										○	
	1558	よそにして	○		○		○		○		○		○		○												
哀傷部	1563	山さとは(座主)			○		○				○				○												
	1564	よそに思ふ	○										○														
	1565	まれにきて	○		○		○		○		○				○												
	1566	ならへこし	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○										○	
	1568	みし夢に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○										○	

部	歌番号	初句	日大本		架蔵本		桂宮本		宮神本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本		備考
			朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	
無常部	1569	みし夢の	○		○		○		○		○		○														
	1570	とへかしな	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
神祇部	1581	神風や	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										○	
	1588	いにしへの																								○	
	1592	こゝに又	○		○		○		○		○		○		○												
	1595	あまの戸を	◎	◎	○	○	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	◎	◎	◎	◎										◎	

注1　歌番号および初句は古典文庫刊「秋篠月清集教家本」によって示す。

注2　諸本の歌の順序の異ったものも特にことわらなかった。

注3　◎は左右点を⊙は上句および下句頭に合点のあることを示す。

第2表　諸本朱墨点数

	日大本		架蔵本		桂宮本		神宮本		松平本		刈谷本		東山本		蓬左本		太山寺本		天理本		京大本		御所本	
	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	墨	朱	朱	朱	墨	朱	墨
花月百首	14	4	11 (1)	3	12	4	12	4	12	4	14	4	12	4	13	4	14	4	1	1	1	1		0
二夜百首	7	1	7	1	7	1	7	1	7	1	7	1	7	1	7	1	7	1	1	1	0	0		1
十題百首	18	7 (1)	19	6	17	6 (1)	15	6 (1)	16	6 (1)	18	7 (2)	17	6	18	7 (1)	20	8 (2)	0	0	0	0		7 (2)
哥合百首	33	27 (4)	31	23	27	27 (4)	27	27 (4)	27	27 (4)	31	18 (1)	27	27 (4)	33	27 (4)	33	27 (4)	15	13	11	9		23 (3)
治承題百首	24	8 (1)	14	10	24	8 (1)	24	8 (1)	24	7 (1)	23	8 (2)	24	8 (1)	24	8 (1)	24	8 (1)	19	5	15	2		6 (1)
南海漁父百首	26	10	23	10	24	7	21	6	25	7	15	8	24	7	23	10	26	11	6	3	5	2		6
西洞隠士百首	14	2	20	1	18	3	16	4	17	3	17	3	18	3	17	4	16	4	0	0	0	0		3
院初度百首	30	20 (2)	31	19	30	20 (2)	27	19	30	18 (2)	32 (1)	19 (2)	30	20 (2)	30	20 (2)	31 (1)	23 (3)	15	10	7	5		20 (2)
院第三度百首	39	18	39	17	38	15	37	15	38	16	38	14	38	13	39	16	38	18	23	13	18	11		17
老若哥合五十首	19 (1)	5 (1)	19	5	19 (1)	5 (1)	16	5 (1)	19 (1)	5 (1)	21 (1)	4 (1)	19 (1)	5 (1)	19	5 (1)	23 (1)	5 (1)	5	5	5	5		5 (1)
句題五十首	20 (1)	9 (1)	20	8	19 (1)	9 (1)	19 (1)	9 (1)	19 (1)	9 (1)	18 (1)	8 (1)	19 (1)	8 (1)	18	9 (1)	21 (1)	11 (1)	3	3	3	3		9 (1)
春部	14	3	14	3	14	3	15	3	14	4	15	3	12	3	0	0	0	0	0	0	0	0		3
夏部	7	2	9	2	9	2	9	2	9	2	6	2	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0		2
秋部	26 (1)	9	23	11	26 (1)	9	26	9	26	9	22 (1)	9	26 (1)	9	0	0	0	0	0	0	0	0		9
冬部	11	4	10	4	10	3	10	3	10	3	11	3	11	4	0	0	0	0	0	0	0	0		2
祝部	11 (1)	3 (1)	12	4	12 (1)	4 (1)	11 (1)	4 (1)	12 (1)	4 (1)	11 (1)	4 (1)	12 (1)	4 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0		3 (1)
恋部	14	8	13	7	13	8	13	8	12	7	13	8	13	7	0	0	0	0	0	0	0	0		8
羈旅部	13 (1)	4 (1)	12	5	13 (1)	4 (1)	14 (1)	4 (1)	12 (1)	4 (1)	11 (1)	4 (1)	12 (1)	4 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0		4 (1)
雑部	16	2	13	0	16	2	16	2	15	2	14	2	14	2	0	0	0	0	0	0	0	0		2
哀傷部	4	2	4	2	4	2	3	2	4	2	3	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0		2
無常部	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0		1
神祇部	3 (1)	2 (1)	3	2	3 (1)	2 (1)	3 (1)	2 (1)	3 (1)	2 (1)	3 (1)	2 (1)	3 (1)	2 (1)	0	0	0	0	0	0	0	0		3 (1)
計	365 (6)	151 (13)	359 (1)	148	357 (6)	145 (13)	343 (4)	144 (11)	353 (5)	143 (13)	355 (7)	132 (12)	351 (6)	142 (12)	241	111 (10)	253 (3)	120 (12)	88	65	54	38		136 (13)

注　（　）内は左右点数を示す。